

# 視覚障害者の観光行動の意思決定に影響を与える要因に関する研究

## —倉敷市美観地区をケーススタディに—\*

### Factors Analysis of Decision Making on Sightseeing Activity by Visually Impaired People: In the Case of Kurashiki Bikan historical quarter\*

石塚 裕子\*\*・新田 保次\*\*\*

by Yuko ISHIZUKA\*\*, Yasutsugu NITTA\*\*\*

#### 1. はじめに

##### (1) 研究の背景

わが国の旅行は、交通機関の発達、国立公園の誕生と併行して新婚旅行、修学旅行が盛んになり、大衆的な旅行が定着したとされている<sup>1)</sup>。すでに生活の一部となった旅行であるが、根岸、井上が障がい者の社会的立場を通して、障がい者の旅について、前産業期から今日までを整理し、漂泊者として生業を立てていた障がい者が、近代になって排除されてきた歴史を振り返っている<sup>2)</sup>。

しかし、近年ではノーマライゼーションの理念が浸透し、福祉のまちづくり分野において、2005年頃から草薙らによる研究報告<sup>3)4)</sup>がなされ、ユニバーサルツーリズムの取組みが全国各地で活発化してきている<sup>5)</sup>。

法制度としては、2006年12月に「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」が施行され移動円滑化基本構想の対象地域が広がり、鉄道駅周辺を中心とする生活機能集積地区だけでなく、鉄道駅から離れた観光地やレクリエーション地区といった非日常の外出を対象とした地区においても移動円滑化の促進が期待される。

内閣府が毎年実施している国民生活に関する世論調査結果によると、今後の生活の力点について、所得・収入や食生活、資産・貯蓄、住生活を抑えて常にレジャー・余暇生活が継続的に最上位となっている<sup>6)</sup>。また、余暇市場においては、近年の経済動向を反映してやや減少傾向にある中で、観光・行楽部門は継続して増加しており<sup>7)</sup>、国民生活において観光は重要な位置づけにあると考えられる。

障がい者においても、厚生労働省が実施している身体障害児・者実態調査における“過去1年間の活動等（複

数回答）”において「旅行・キャンプ・つり等の活動（24.3%）」が最も高くなっており、生活における楽しみにおいて旅行やレジャーは重要な位置づけにあるといえる<sup>8)</sup>。しかし、その一方で、平成20年度東京都福祉基礎調査<sup>9)</sup>によると、“障がいのためにあきらめたり妥協したりしたことについて”，身体障がい者は「旅行や遠距離の外出」が41.5%と最も高く、障がい者にとって、旅行は未だに多くの障がいがあるといえる。

##### (2) 研究目的

我が国の障がい者の旅行、観光に関する研究はまだ少なく、i)観光ユニバーサルデザイン全般に通じて課題を整理したもの<sup>3)4)</sup>、ii)観光施設等の点検調査により課題を分析したもの<sup>10)11)</sup>、iii)モニター調査等を通じて障がい者の旅行実態を分析したもの<sup>12)13)</sup>、iv)障がい者の観光に関する意識について分析したもの<sup>14)15)</sup>に分類される。

ii)～iv)に関する研究は主に車いす使用者を対象としたものが多く、視覚障がい者に関する研究は少ない。また、健常者等との比較などによりその特性を分析したものは少ない。

筆者らは既往研究において、歴史的観光地における視覚障がい者の自立的な観光行動のニーズに関する調査を行い、地区を周遊・散策するなどといった移動を伴う行動範囲の広い観光行動について、視覚障がい者のニーズが行動として顕在化していないことを確認した<sup>16)</sup>。

そこで本研究は、視覚障がい者の旅行の実態を健常者と比較分析してその特性を整理する。その上で、視覚障がい者の観光地での散策行動について意思決定する際に影響を与える要因を抽出することを目的とする。研究目的は次の2点に整理される。

- 1) 視覚障がい者の観光行動の特性の把握
- 2) 観光地における散策行動に関する意思決定の要因の抽出

なお、2)については、ケーススタディ地区として岡山県倉敷市美観地区を対象に行う。また、本研究で対象とする“旅行”とは宿泊を伴う国内旅行をいい、“観光行動”とは、旅行先において当該地を楽しむために必要な行動

\*キーワード：観光・余暇

\*\*学生会員，博士後期課程，大阪大学大学院工学研究科  
(大阪府吹田市山田丘 2-1, TEL:06-6879-7610,  
E-mail:ishizuka@civil.eng.osaka-u.ac.jp)

\*\*\*正会員，博士(工)，大阪大学大学院工学研究科

をいう。

## 2. 調査の概要

### (1) 調査方法

調査の概要は表-1 に示すとおりである。設問は、国内を対象とした旅行の実態とニーズなど、一般的な観光行動の実態に関する設問のほか、ケーススタディ地区である倉敷市美観地区についての印象や観光行動の経験、ニーズならびに個人属性について設問を設けた。

一般的な観光行動の実態については、健常者との比較分析を行うため、国民の一般的な傾向を示す既往調査として、概ね3～5年ごとに内閣府が実施している「自由時間の活用と旅行に関する世論調査(2003年8月実施)」<sup>17)</sup>

(以下、「内閣府調査」と示す。)を参考に同じ設問を設けた。アンケートは、点訳調査票ならびに拡大コピー調査票(A4→A3)を準備し、倉敷市視覚障がい者協会を通じて配布し郵送で回収した。調査対象者は、倉敷市美観地区を認知していると想定される倉敷市及び岡山県内の在住の視覚障がい者とした。ただし、観光行動の一般的な観光行動の実態については、回答数を確保するため、関西在住の視覚障がい者の個人ネットワークを通じて8名の者から電子メールで回答を得た。

表-1 調査概要

調査日	平成21年(2009)年8月
調査対象者	倉敷市視覚障害者協会会員 岡山県立盲学校職員 その他
配布数及び回収数	80票配布, 63票回収(回収率79%)
調査方法	点訳調査票及び拡大印刷調査票の配布、郵送回収 Word文書ファイルを電子メールで送受信
設問項目	第1部:国内を対象とした旅行の実態とニーズ(12問) 第2部:倉敷市美観地区の印象について(4問) 第3部:美観地区での観光行動の経験とニーズ(11問) 第4部:日常生活と余暇活動に対する意識(3問) 第5部:個人属性及び視覚の程度(11問)

### (2) 回答者の属性

回答者の属性は表-2 に示すとおりである。歩行能力得点は、柳原らの調査<sup>18)</sup>を参考に地域性に影響されにくい表-3 に示す4つの設問に対して、「できる(2.5点)」、「かなり慣れた道ならできる(1点)」、「難しい(0点)」とし、その合計点により算出している。回答者は、男性の占める割合が高く、平均年齢53.0歳とやや高めとなっている。

表-2 回答者の属性

サンプル数	63名(内、岡山県内在住者55名)			
性別	男性51名 女性12名			
障害種別	全盲(先天性)10名、早期全盲(5歳未満で失明)3名、後期全盲(5歳以上で失明)18名、全盲(不明)2名、弱視30名			
	平均	標準偏差	最高値	最低値
年齢	53.0歳	15.1歳	83歳	19歳
歩行能力得点	6.3点	3.0点	10点	0点

表-3 歩行能力得点の算出方法

信号のある交差点と信号のない交差点を判別する	できる(2.5点) かなり慣れた道ならできる(1.0点) 難しい(0点)
音響信号のない交差点の横断	
一人でバスや電車に乗って出かけることができる	
直線歩行することができる	
合計	10点満点

歩行能力の分布は、得点別に3段階(低い:0点以上3点未満, 中:3点以上7点未満, 高:7点以上)に分類すると、同率分布となった(表-4)。また、日常の外出頻度も表-5 に示すとおり3段階に分類すると、週に4日以上外出している人が約60%を占め、月に数回以下しか外出しない人が約20%であった。

表-4 歩行能力得点の分布

歩行能力	(歩行能力得点)	回答数	割合
低	0-3	16	29.6%
中	3-7	19	35.2%
高	7以上	19	35.2%
合計		54	

表-5 日常の外出頻度

区分		回答数	割合	
低	ほとんど外出しない	3	11	20.4%
	月に数回程度	8		
中	週に1日程度	6	12	22.2%
	週に2～3日	6		
高	週に4～5日	6	31	57.4%
	ほぼ毎日(週6日以上)	25		
合計		54	54	

## 3. 視覚障がい者の観光実態

### (1) 実態の基本的事項

過去1年間(平成20(2008)年4月～平成21(2009)年3月)の宿泊をともなう旅行経験の有無は、表-6 に示すとおり、観光旅行は回答者の約50%が行っている。その一方で、泊まりがけの国内旅行をしなかった人は約25%となっている。

また、旅行における同行者の状況は、晴眼者の同行、協会などの団体による旅行が多いものの、視覚障がい者同士のみ、一人での旅行を行う人も約30%程度いることが確認された(表-7)。

表-6 過去1年間の泊りがけの国内旅行の経験

旅行の種類	回答数	割合
観光旅行	32	50.8%
出張・業務などの旅行	19	30.2%
帰省・訪問などの旅行	18	28.6%
観光もかねて、出張・業務や帰省・訪問などの旅行	10	15.9%
泊まりがけの国内旅行はしなかった	16	25.4%
回答者数(複数回答)	63	

表-7 旅行の同行者

同行の種類	回答数	割合
一人で行く	6	13.3%
友人、家族など仲の良い、視覚障がい者同士のみで行く	7	15.6%
友人、家族など仲の良い、晴目者の人と一緒に行く	17	37.8%
所属する団体（学校、協会など）で行く	15	33.3%
合計	45	

(2) 視覚障がい者の観光行動特性

観光行動において、視覚障がい者と健常者の間に違いがあるかどうかについて分析を試みた。

内閣府調査の結果を一般的な国民の傾向を示す結果（以下、一般平均と示す。）として想定し、「旅行先の主な行動」、「過去1年間に泊まりがけの国内旅行をしなかった理由」について本調査の結果と比較を行った。それぞれの結果は、Pearson のカイ2乗検定及びサンプル数が少ない場合はフィッシャーの正確確立検定により、有意差についての検定を行った。

a) 旅行先での観光行動の経験

内閣府調査で設定された旅行先の主な行動15項項目について、過去の経験について回答を得た(表-8)。

視覚障がい者の旅行先での主な行動経験は、「温泉での休養」、「旅行先の土地の郷土色豊かな料理等を食べる」、「美しい自然・風景を見る」、「史跡・文化財・博物館・美術館めぐり鑑賞する」の順に経験率が高く、健常者のその順位（「美しい自然・風景を見る」、「温泉での休養」、「旅行先の土地の郷土色豊かな料理等を食べる」とほぼ同じ傾向を示している。

一般平均と比較すると、「史跡・文化財・博物館などを巡り鑑賞する」、「寺社、仏閣等の参詣」、「旅先の土地の郷土色豊かな料理等を食べる」、「旅先の土地の郷土色豊かな名産品・特産品等の買い物をする」、「体験型レクリエーションをする」、「スポーツ、レクリエーション活動」、「都市での観光・体験」、「一緒にいった人たちとにぎやかに過ごす」、「のんびりくつろぐ」についての経験率が視覚障がい者の方が高く、統計的に有意な差が確認された。

視覚障がい者は、健常者とほぼ同じ観光行動を経験しており、食べる、買い物をする、体験するといった体感型の行動を積極的に行っている傾向がある。その一方で、史跡・文化財・博物館・美術館などを巡り鑑賞する、美しい自然・風景を見るといった視覚的な観光行動についても、多く行われていることが確認された。

b) 旅行をしない理由

泊まりがけの国内旅行をしなかった理由は、「連続して休めないから」、「金銭的に余裕がないから」が最も多く、一般平均と同じ傾向が確認された(表-9)。

一方、視覚障がい者と一般平均との有意差が確認され

た理由は「一緒に行く人がいないから」、「旅行目的にふさわしい観光地や施設等が見当たらないから」の2点であり、視覚障がい者にとって旅行の同行者の有無および事前情報の不足が旅行を行う意思決定の阻害要因になっているのではないかと考えられる。

表-8 旅行先での主な行動経験

	一般 (内閣府調査)	視覚障がい者 (本調査結果)	X2	P値	判定
全数	1142	47			
美しい自然・風景(山、川、滝、海、自然公園等)を見る	698 (61.12)	26 (55.32)	0.64	0.424	
史跡・文化財・博物館・美術館などを巡り鑑賞する	364 (31.87)	26 (55.32)	11.26	0.001	**
寺社・仏閣等の参詣	217 (19.00)	18 (38.30)	10.60	0.001	**
その地で行われている「祭り」などのイベントを見る	78 (6.83)	2 (4.26)	0.48	0.490	
旅行先の土地の郷土色豊かな料理を食べる	411 (35.99)	28 (59.57)	10.78	0.001	**
旅行先の土地の郷土色豊かな名産品・特産品等の買い物をする	225 (19.70)	22 (46.81)	20.15	<0.001	**
体験型レクリエーション(陶器作成、和紙づくり、自然体験等)をする	47 (4.12)	7 (14.89)	12.10	0.001	**
遊園地・テーマパークで遊ぶ	182 (15.94)	9 (19.15)	0.35	0.557	
スポーツ・レクリエーション活動(スキー、テニス、ゴルフ等)をする	139 (12.17)	12 (25.53)	7.27	0.007	**
都市での観光・体験(生活体験)	51 (4.47)	7 (14.89)	10.58	0.001	**
車でドライブする	215 (18.83)	4 (8.51)	3.20	0.074	
温泉での休養	622 (54.47)	29 (61.70)	0.95	0.329	
家族と一緒に遊ぶ	278 (24.34)	11 (23.40)	0.02	0.883	
一緒にいった人たちとにぎやかに過ごす	291 (25.48)	19 (40.43)	5.23	0.022	*
のんびりくつろぐ	177 (15.50)	25 (53.19)	45.48	<0.001	**

( )内は各全数に対する割合(%)

\*\*p<0.010 \*p<0.050

表-9 1泊以上の国内旅行に行かなかった理由

	一般 (内閣府調査)	視覚障がい者 (本調査結果)	X2	P値	判定
全数	961	16			
金銭的に余裕がないから	330 (34.34)	4 (25.0)	0.610	0.435	
連続して休めないから	281 (29.24)	5 (31.25)	0.031	0.861	
なんとなく旅行をしないまま過ぎた	213 (22.16)	5 (31.25)	0.749	0.387	
家族と一緒に休みが取れないから	154 (16.02)	4 (25.0)	0.935	0.334	
健康・体力に自信がないから	134 (13.94)	4 (25.0)	1.586	0.208	
留守中に家族(子ども、老人など)の世話をする人がいないから	133 (13.84)	1 (6.25)	0.766	0.381	
高齢・障害等のため、移動や滞在に不安があるため	75 (7.80)	3 (18.75)	2.567	0.109	
計画を立てたり、準備をするのが面倒だから	65 (6.76)	1 (6.25)	0.007	0.954	
旅行は好きでないから	50 (5.20)	1 (6.25)	0.035	0.852	
一緒に行く人がいないから	42 (4.37)	4 (25.0)	14.928	0.000	**
旅行目的にふさわしい観光地や施設等が見当たらないから	26 (2.71)	2 (12.50)	5.423	0.020	*
出張、家事、帰省、学校行事等の旅行で観光、レクリエーション、スポーツなどしたから	23 (2.39)	1 (6.25)	0.977	0.323	
海外旅行をしたから	16 (1.66)	0 (0.00)	0.271	0.603	

( )内は各全数に対する割合(%)

\*\*p<0.010 \*p<0.050

#### 4. 倉敷美観地区における散策行動の意思決定に影響を与える要因分析

##### (1) 散策意図に影響を与える要因抽出

筆者らは、既往研究において、原則、介助者を伴わない自立的な観光行動のニーズ（してみたいと思うかどうか）について調査を行った<sup>10)</sup>。その結果、「買い物をする」、「食事のメニューを選ぶ」、「美術品などの展示物の内容を確認する」といった移動を伴わない観光行動のニーズは顕在化しているが、「美術館等の館内を見学する」、「観光地内を周遊・散策をする」といった移動を伴う行動範囲の広い観光行動のニーズは、顕在化していないことを確認した。この結果は、視覚障がい者は、一般的に初めての場所では一人では行動しないといわれていることから、“自立的な行動”という条件が回答に大きな影響を与えたと考えられる。

そこで本研究では、観光地における散策行動の意思決定（以下、散策意図という）ならびに訪問意図について、“自立的な行動”という条件を除いた表現で行動ニーズの把握を行うこととした(表-10)。

表-10 散策意図、訪問意図に関する設問

訪問意図	今後、時間等に余裕があり、機会があれば、美観地区を観光目的で訪れたいと思いませんか。
散策意図	今後、時間等に余裕があり、機会があれば、美観地区において、徒歩で複数の施設を巡ったり、まちの雰囲気を感じながら散歩したりする行動（周遊・散策）をしたいと思いませんか。

得られた結果から、散策意図、訪問意図に影響を与える要因を抽出するため、個人因子(4項目)、環境因子(2項目)に加えて経験因子(5項目)を設定した。視覚障がい者は健常者と比較して初めての場所へ行くことに障壁を感じやすいことを考慮し、過去の経験が行動の意図に影響を与えている可能性があるとして仮定し、経験因子を設定した。散策意図の有無ならびに訪問意図の有無と各因子のクロス集計を行い、独立性の検定を行った。 $\chi^2$ 検定により得られた有意確率を表-11に示す。

個人因子はいずれも散策意図、訪問意図と有意な関係性はみられなかった。

経験因子では、散策意図と「当該地区の散策経験」、「他地区での散策経験の有無」とにやや関係性がみられ、散策行動の経験がある人ほど、散策したいと感じる傾向にあるといえる。

環境因子では、散策意図と「道の印象」、訪問意図と「地区の印象」に有意な関係性が確認された。訪れた地区の環境の印象が良い人ほど、散策意図、訪問意図が高くなる傾向にあると考えられる。

表-11 散策行動意図の回答と個人因子、環境因子との独立性検定結果

		訪問意図	散策意図
個人因子	年齢	52.8%	52.8%
	歩行能力	55.8%	32.1%
	所得収入の満足度	26.6%	50.0%
	同居人の有無	45.4%	45.4%
経験因子	当該地区の訪問経験	27.2%	17.9%
	当該地区の散策経験	27.2%	5.2%
	他地区での散策経験の有無	41.2%	7.6%
	視覚障害者同士の旅行経験	49.4%	24.9%
	外出頻度	45.0%	20.8%
環境因子	地区の印象	0.1% **	5.4%
	道の印象	8.4%	1.9% *

※%は $\chi^2$ 検定による有意確率

\*独立性5%で棄却される \*\*独立性1%で棄却される

##### (2) 散策意図に影響を与える要因分析

散策意図の有無（散策したいと思う、思わない又はわからない）を外的基準とし、個人因子として「歩行能力」、経験因子として「当該地区の散策経験」、環境因子として「道の印象」を説明変数として、数量化Ⅱ類分析を実施した。

散策意図に最も影響を与えているのは、環境因子である「道の印象」である。同様に経験因子である「当該地区の散策経験」も散策意図に影響を与えていることが確認された。一方、個人因子である「歩行能力」は散策意図に影響を与えていないと考えられる。

表-12 散策意図に影響を与えている要因の分析結果

		ガウリスコア	レンジ	偏相関係数	有意確率	回答数	散策希望率
歩行能力(48)	高い	0.13	0.36	0.11	.475	20	66.7%
	低い	-0.22				10	55.6%
当該地区の散策経験(48)	複数回有	1.28	1.76	0.42	.003**	11	84.6%
	1回以下	-0.48				19	54.3%
道の印象(48)	よい	1.30	1.90	0.47	.001**	13	86.7%
	悪い又はわからない	-0.59				17	51.5%

サンプル数：48 相関比：0.33

\*\*：有意確率1%未満

#### 5. おわりに

本稿では、視覚障がい者の旅行の実態を把握し、観光行動について健常者と比較分析を行い、その特性を把握した。その上で、既往研究において行動のニーズが顕在化していないことが確認されている視覚障がい者の観光地における散策行動について、その意図に影響を与える要因について分析を行った。その結果、主に以下の知見が得られた。

### (1) 視覚障がい者の観光行動の特性

視覚障がい者は、旅行を活発に行っており、視覚障がい者同士、一人で旅行を行う人が約 30%程度は存在していることが確認された。

また、旅行先での行動経験は、一般平均(内閣府調査の結果)と比較して、総体的に活発に行われており、食べる、買い物をする、体験するといった体感型の行動を積極的に行っている傾向が確認された。また、「美しい自然・風景を見る」、「史跡・文化財・博物館・美術館めぐり鑑賞する」といった、視覚機能が必要な行動についても一般平均と同じ傾向であることがわかった。

旅行をしない理由の特性としては、「一緒に行く人がいないから」、「旅行目的にふさわしい観光地や施設等が見当たらないから」の2点について阻害要因となっている可能性が確認された。

以上のことから、視覚障がい者は活発に多様な観光行動を行っており、観光地において視覚障がい者への対応が必要なことが確認できたといえる。

### (2) 観光地における散策行動に関する意思決定の要因

本研究では、筆者らの既往研究においてニーズが顕在化していない傾向が確認された散策行動について、自立性の条件を除いて、行動意図に影響を与える要因について分析を行った。

その結果、歩行能力をはじめ年齢、所得収入、同居人の有無などの個人因子は散策意図に影響を与えていないことが明らかになった。その一方で、環境因子である「道の印象」や経験因子である「当該地区の散策経験」は散策意図に影響を与えていることが統計的にも有意に明らかになった。このことから、自立性を除く散策意図には、観光地の環境と過去の経験の有無が影響を与えているといえる。

### (3) 今後の課題

本研究結果より、視覚障がい者は活発に旅行し、観光行動を行っているが、道の状況など観光地の環境や過去の経験の有無により、「行ってみたい」というニーズが顕在化されず、十分に当該観光地を楽しむ行動に至っていない可能性があることが確認された。

一方、自立性を考慮しない散策意図については、年齢や歩行能力といった個人要因は影響しないことが確認できたことから、環境要因への配慮や経験を増やすことで視覚障がい者の観光行動ニーズを活性化させることができると考える。

しかし、本研究では環境要因について、当事者の主観的感覚より分析しており、客観的な要因となっていない。今後は、客観的な指標を用いた分析が必要であると考えられる。また、経験要因は個人要因の一部とも考えられるこ

とから、さらなる分析が必要であると考えられる。

さらに、筆者らは観光地を楽しむためには、自己選択に基づく行動、自由で自立的な行動ができることが不可欠と考えている。そのためには、視覚障がい者の観光行動においても自立性への配慮が必要と考えており、今後は、自立性を考慮した行動の意思決定に影響を与える要因についても分析していく必要があると考えられる。

### 【謝辞】

本研究の実施にあたっては、倉敷市視覚障害者協会会長片岡美佐子様をはじめ、多くの視覚障がい者の方にご協力いただきました。皆様に深く心から感謝いたします。

最後になりましたが、本研究は交通エコロジー・モビリティ財団より平成 20 年度 ECOMO 交通バリアフリー研究助成により実施いたしました。ご支援いただいた当財団に深く感謝いたします。

### 参考文献

- 1) 白幡洋三郎：旅行のススメ，中公新書，1996
- 2) 根橋正一・井上寛：漂泊と自立—障害者旅行の社会学—，流通経済大学出版社，2005. 06
- 3) 草薙威一郎，清水政司，秋山哲男，宮井久男 他：観光ユニバーサルデザインの意義，日本福祉のまちづくり学会第 8 回全国大会講演集，pp291-294，2005
- 4) 清水政司，草薙威一郎，秋山哲男，宮井久男，杓名豊明：観光ユニバーサルデザインの課題，日本福祉のまちづくり学会第 8 回全国大会講演集，pp167-170，2005
- 5) 国土交通省総合政策局：観光のユニバーサルデザイン化手引き集，2008
- 6) 内閣府：平成 21 年度国民生活の世論調査，2009
- 7) レジャー白書 2008：財団法人日本生産性本部余暇創研，pp45，2008
- 8) 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課：平成 18 年度身体障害児・者実態調査結果，pp33，2008
- 9) 東京都 平成 20 年度東京都福祉基礎調査「障害者の生活実態」，2009
- 10) 竹中京子，大塚毅彦：寺社仏閣のバリアフリー整備の取り組み状況と課題，日本福祉のまちづくり学会第 9 回全国大会概要集，pp525-528，2006
- 11) 堀田貴之，北川博巳，柳原崇男，多淵敏樹，三星昭宏：ユニバーサル社会の実現に向けた歴史的文化財の観光環境整備に関する研究—姫路城における考察—，日本福祉のまちづくり学会第 12 回全国大会概要集(CD-ROM)，2009
- 12) 内藤恵，新谷陽子，原文宏：北海道における移動制約者の旅行支援に関する研究 - 障がい当事者によるモニター旅行調査報告 - ，日本福祉のまちづくり第 8 回全国大会講演

集, pp175-178, 2005

- 13) 竹内奈津子, 森傑: 障害者のための旅行の企画と実施からみた移動環境デザインの課題—ひまわり号を走らせる札幌実行委員会のボランティア活動に注目して—, 日本都市計画学会都市計画論文集No42-2, pp20-29, 2007
- 14) 森山昌幸, 藤原章正, 杉恵頼寧 他: トリップ前情報が障害者の訪問観光地決定に及ぼす影響, 土木計画学研究・講演集 No23(2), pp861-864, 2000
- 15) 金利昭: 歴史自然観光地における観光資源の保全とバリアフリー整備のトレードオフに関する研究—偕楽園を事例として—, 日本都市計画学会都市計画論文集 No42-3, pp157-162, 2007
- 16) 石塚裕子, 新田保次: 歴史的都市における障害者の観光実態とニーズに関する基礎的研究, 土木計画学研究・講演集 Vol. 37(CD-ROM), 2008
- 17) 内閣府: 自由時間の活用と旅行に関する世論調査, 2003. 08
- 18) 柳原崇男, 三星昭宏: 方向感覚質問紙簡易版(SDQ-S)を用いた視覚障害者の歩行能力測定と歩行支援システム評価への応用に関する研究—全盲者・重度弱視者を対象として—, 土木学会論文集D Vol. 64 No2, 285-298, 2008